

南方（フィリピン）

ミンダナオ第一二五野戦飛行場設

定隊の記録

愛知県 松井 駿 平

乗 船

昭和十九年四月二十三日、動員下令あり、部隊は豊橋で慌ただしく出発準備を整えた。隊長は戸田与右衛門大尉、以下古参の召集中尉一名、兵科の少尉四名、軍医中尉一名、建技中尉一名、主計少尉一名、工兵少尉一名、技術少尉一名、准尉一名、雇員（測量に従事する十八歳の少年）一名、下士官三五名、他は兵隊で合計一七五名、兵の大部分は三十五歳より四十五歳ま

での、召集で来た年の多い人ばかり、機材は牽引車一台、トラック一三台。手違いがあつて、ニッサンのトラックにトヨタの部品を持つて行つたため、修理に大変困つた。米、塩、布地等を大量に持つて行つた。現地で、一、〇〇〇人か二、〇〇〇人位の住民を使用する予定で、一七五名に軍医一名が配属されたわけである。

当時、ニューギニアのマノクワリへ行く予定で、四月二十五日編成を完了し、二十七日夜豊橋を出発して門司に向かつた。

我々の乗る船は「第一真成丸」という四〇〇〇トン位の、船令二十年以上のオンボロ船である。この船は、前の航海ではニューギニアまで往復して爆撃を受けたが、爆撃を受けたというだけで全くの無傷という古強

者である。有功章を持つているがボロ船にかわりなく、八ノットしか速力が出ない。従って、今回の二四隻の

船団では、優秀な船があつても、このボロ船の速力に速度を合わせて行く訳である。

二十九日一日かかって貨物の積載を終わり、その夜乗船した。上弦の月が西に傾く頃、私は船のタラップに足をかけた。もう二度と踏むこともない内地の土を強く何回も踏みしめてから登った。兵室は狭苦しく、座れば頭がつかえ、横になつて寝ることも出来ない。うずくまつて、今から何日かかって目的地に到着するか分からない航海中、小さくなつていなければならぬものと覚悟した。しかし、幸いに医務室は船の中央機関室の前方にあつて相当の広さがあつた。

次第に敵潜水艦の出没の激しくなつてきた今日この頃のこととて、我々は二四隻で船団を組み、五隻の護衛艦に守られることになつた。船団の中には一万トン級の「扶桑丸」も巨体を見せている。四月三十日は港外に一泊の予定で、朝早く船は岸壁を離れた。

赤木中尉とともに私は、遠ざかつて行く埠頭を眺め

ていた。誰一人見送る者もない秘密の出港である。

航 海

船団は敵潜を避けて支那海を支那大陸寄りに進む。

門司を出て西進する。陸地は全然見えない。どちらを向いても紺青の海ばかり、出港して三日頃より危険海域に入る。救命胴衣を絶えず傍らにおいて身から放さない。何しろ全くの金槌であるから……。

偶然乗り合わせた甲種野戦飛行場設定隊（隊員五〇名、機械も多数あり、自力で飛行場を作る部隊）の軍医に大学同級の福士（現在大学の病理学の教授になつている）がいた。彼は以前台湾へ行った時海没した経験があり、夜になると落ち着きをなくした。白い帽子をかぶり、服を着て、非常食（鯉節一本）を缶に入れて首に下げ、ほとんど甲板にいた。私も医務室で寝る気がないので一緒に甲板で夜を過ごしたものである。

南下するにつれ次第に暑くなつてきた。通風孔からはほとんど風も入らない。暑くて耐えられないので、たいてい甲板にいた。船室の横のデッキの日陰で休む。

四日、五日、六日と相変わらず八ノットの遅々たる速度でジグザグに進む。海の色も濃紺になったり真つ青になったりする。最初よく食べた食事も、今は茶碗に一杯がやっとである。運動不足と暑さと船酔いですっかり食欲がない。

八日朝、高雄に着いたその夜出港して、いよいよ魔のバシー海峡にかかる。今までに何隻も船が沈んでいる海は、不気味なくらい静かである。緊張の夜が明け、まず助かったとほっとする。船団はルソン島の西海岸近くを南下する。山に一定の間隔を置いて、のろしが上がらる。白い煙が昇る。夜はこれが火となり、点々と一定の間隔をおいて新しい灯がつき、古い灯は消えてゆく。セカンドサーは平然と「何時もこんなです」と言うが、余り良い気持ちはしない。

九日の夜は更けていった。明夜はマニラに着く予定である。十日の朝がきて、大きな赤い太陽が水平線上に現われてきた。やれやれ無事に過ぎた。今夜はマニラに着くと、ほっとして船室に降りようとした時、轟音である。ドカンドカン二発。船腹は凹むばかりに震

動を感ずる。すわつ来たなど、直ぐ甲板にかけ昇った。右前方、太陽を背にして水煙が高く上がり、やがてそれは崩れ落ちて白い泡になった。そして海面はすでに、忽然として艦の姿はなくなっていた。護衛艦が轟沈したのである。

同時に、我々の船の前を、二筋の雷跡と白い線となつて走つて行つた。これにむかつて、船首の砲手が慌てて砲撃する。各船からも無茶苦茶に撃つ。隣にいた船長は「無駄だ、撃つな」と大声を出す。耳に入らず、ドンドン撃つていた。

右隣を見ると、もう一隻大きな貨物船が傾いていた。この船がいなかったら恐らく魚雷は、我々の船そのものに命中していたであろう。

残りの護衛艦が右に旋回して、これと覚しき所へ爆雷を落とす。震動が我がボロ船の底にひびいて、今にも穴があきそうである。船首から「軍医はおらんか」と怒鳴る声が聞こえる。第一発の砲弾が、マストから船首まで張つてあるワイヤーに当り、これが切れて飛んで、二名の兵が負傷した。顔面と右大腿部のけがで

ある。いずれも後でマニラで入院させることになる。さて、間もなくもとの静けさにもどり、船は何事も無かったかのごとく進む。

魚雷が命中した貨物船は次第に傾いて、轟音と共に船首を上げる。と同時にスーッと沈んでしまった。雷撃を受けてから、約四〇分後である。一隻の救助船が、護衛艦と共に戻っていった。後で分かったことであるが、護衛艦の乗組員は、轟沈しても三分の二は助かったそうである。貨物船は、自ら積んだ爆雷の誘発のために沈没を早め、海中にいた兵達もそのショックで多数が死亡したということで、犠牲は三分の二に及んだとのことである。リングアエン湾の入り口付近における、十日朝の出来事だった。

その夜、船団は、コレヒドール島の傍の狭い水道を通ってマニラ湾に入って行った。前方にライトを灯した案内艇に続いて入港した。夜十時頃であろうか、旗を降ろしてエンジンを止め、ガラガラと碇を降ろして我々の苦難の航海は終わった。

甲板に出ると、船長、運転士、事務長、指揮官など

が集まって、無事を祝する酒を汲みかわしていた。我々も早速仲間に入る。キューと酒が喉にしみる。海没しなかった喜びを噛み締める。街のビルの灯は煌々と輝き、南十字星は水平線に傾いて、マニラの夜は更けて行った。しかし、我々には未だニューギニアまで行くという先の長い旅が待っているのである。

上 陸

部隊はマニラで待機すること約一ヵ月で、いよいよミンダナオ島北部のカガヤン市に行くことになった。カガヤン市の周辺に飛行場群を造れとの命令が下り、昭和十九年六月十六日、三、〇〇〇トン位の「羽後丸」という船に乗船して、十七日の夕刻に出港した。

途中、セブ島にて燃料を補給することになり、セブ港に入港した。周囲の状況によって約一〇日間停泊し、六月二十九日に出港、ミンダナオ海を南下し、内地地発以来二ヵ月余りで漸く任地のカガヤン市に到着した。六月三十日上陸してから、我々の部隊の戦闘は始まった。戦闘といっても、華々しく鉄砲を打ち合うような戦闘ではなく、立派な飛行場を造ると言う行動の

ことである。

六月三十日、我々四名の将校は、三設司令部（第三野戦飛行場設建司令部）の連絡所に行った。夕刻から雨が降り出し、車は雨に濡れた坦々たる舗装道路を疾走して、間もなく連絡所に着く。丁度いいあんばいに、司令官は夕食を摂っていた。鼻の下にちよっぴり髭を生やした赫ら顔は、脂でぎらぎらしている。少々尖った口から、唾液を飛ばして語る。お世辞であろうが——我々の到着を非常に喜び、かつ、力になると言ってくれた。氷で冷したビール、肉の煮付け、酒等々如才なく振る舞ってくれる。遂々長居して夜遅く船に帰った。

翌七月一日、我々は上陸した。荷役もどんどん進み、ウインチで米俵を吊り上げると、滝のように米が落ちこぼれる。勿体ない話である。

その時、ふとした事故が起きた。切れた網に打たれて、他の部隊の兵が、船と岸壁の間に落ちて、遂に姿を見せなかった。危険なバシー海峡を無事に通過して来たというのに、こんな事故で命を落とすなど、家族

の人が事実を知ったら、どんなにか嘆かれることだろう。

作 業

到着と同時に、八月末までに飛行場を完成すべしと言う命令を受け取った。ある日、部隊長、安達中尉、赤木建技中尉、各隊長の三名の少尉、池田主計中尉について私も現場を見に行った。すごい林である。椰子の木も多数あって、伐開するだけでも相当かかりそうである。

予定滑走路を、密林を分け入って行った。所々に凹地があり、これに水が溜っている。多分敵軍が爆撃した時の弾痕であろう。

日はかんかん照りで、林の中は通風が悪くて非常に暑い。一、五〇〇メートルも歩いたかと思われる頃、遂に疲れて休んだ。生まれて初めて椰子の汁を飲んだ。冷たく少々甘酸っぱい液体は、乾いた喉を潤すに充分である。コブラも食べた。最初の間は、さほど美味とも思えなかったが、馴れるに従って非常においしく食べられるようになった。作業は伐開から始まり、半ば

より、隊を半分に分け、安部隊と幸野隊との競争の形になった。幸野隊の方は太い木が多く、竹藪も多かった。比島の竹藪は内地と異なり刺がありこれが互いからみ合つてなかなか取れない。安部隊の方は草原が多く割合に楽なように思われた。

船中の不衛生な生活の後のこととて、兵隊達はなかなか動かなかつたが、雨の降らぬ限り作業は続行された。伐開もほとんど終わり、地均しがいよいよ始まつたが、強行作業のため兵隊達は次第に過労に陥つていった。

数百人を集めるはずの現地人も、僅かしか集まらない。街に出掛けて米をやる。布地をやる。と宣伝してなんとかやつと集めて来た。米国式に習慣づけられた彼等は、ダンスを好み、毎土曜日には必ずダンスパーティを開いて夜遅くまで踊りぬく。日頃汚いボロを着ていた連中も、この日ばかりは、新しい折り目のきちんとついた服を着る。日頃ハダシで皮の固くなった足に靴下をはき、皮靴をはいている。老若を問わず男女二人づつ抱き合つて簡単な音楽に合わせてステップを

踏むのである。

我々の部隊でも、ある土曜日、ダンスパーティを開いた。労務者獲得の宣伝のためである。区長を一番大切にするという意味から、部隊長と私の間に席をとつて接待するのであるが、いろいろ話をするのに苦勞した。

初空襲

作業場の現地人はほとんど働かない。興味のないのに強制的に引つ張り出されているせいもある。朝一三台のトラックで各町に出掛けて集めてきて、仕事が終わると米五〇〇グラムに加えて二ペソを与えて、また車で送り帰すのである。彼等は仕事で陽気に騒いで話ばかりしているが、手の方はなかなか動かない。上の方から作業の督促を受けるが、原住民の集まりが悪いため、遂に憲兵隊を通じて強硬に談じ込み、約四〇〇名近く集めることが出来た。

飛行場で知事の熱演あり、一生懸命作つて、早く米国を打ち負かし、将来は平和な飛行場として旅客機の発着を期待し、カガヤン市は榮える。「ザ、カガヤン」と大いに氣勢をあげ、翌九月九日より毎日出て作業す

ることになった。我々はその成功を喜び九日からの仕事の進捗ぶりに期待をかけていた。

九日の朝が明けた。よく晴れた日で、午前七時少し過ぎ、山野隊の連絡機が飛んでいる。最近直ぐ近くのカガヤン南飛行場に最新鋭のキの八四、一個戦隊が来るとの情報があったので、我々はその最新鋭機を見るのを楽しみに待っていた。連絡機が椰子葉の陰に見えなくなった時、埠頭の方面から大編隊が飛んで来た。皆喜びの声を挙げて喜んだのも束の間、突然編隊を解いたかと思うと、港や飛行場に突っ込んで来て、機銃掃射もする。爆弾も落とす。

友軍機と思って喜んで手を振っていたら、あに計らんなや敵機で、グラマン約七〇機の急襲である。飛行場の方面を銃撃するヒステリックな音がある。キューンと急上昇して、我々のいる椰子林の上を星のマークも鮮やかに旋回して、再び急降下していく。埠頭の方は爆音が物凄い。南飛行場の方面でも黒煙が上がリ、銃撃爆撃音が響く。

今まで平和で、前日「ザ、カガヤン」と手を高く挙

げて祝っていたカガヤンは、突然戦場となった。これが比島作戦の第一撃である。作業隊は既に飛行場に行っている筈である。急いで準備をして、寺田伍長と駆けつけようとした時、大きなマンゴの木の下に部隊長がいて、大した事はない。待て待てといったけれど、作業隊が気にかかるので、私は取りあえず寺田伍長を走らせて待つことにした。間もなく日少尉が興奮のあまり目を引きつらせ、急を告げにやって来た。

敵機は一瞬の風のごとく去った。私は急いで車に乗り、現場にかけつけた。悲惨！各所から黒煙が上がっていて、大きなダグラス輸送機も火を吹いている。隠してあった二、三機も全部火の海になり負傷者も若干出た。

一少尉は腹部と脚に、松村兵長は足に。一少尉を庇った勇敢な兵も脚に、S一等兵は腹部に負傷していた。寺田伍長の機敏な処置により一瀕死のS一等兵を残して他は、一番先に病院に運ばれてしまった。Sは、機関砲弾を背部から上腹部に抜けるように受け、胃、肝臓の一部、腸の一部が切れて腹壁から飛び出し、砂に

まみれ虫の息で病院に着くまでに絶命してしまった。部隊最初の犠牲者である。

前記したように寺田伍長の機敏な処置によって、真っ先に野戦病院に運ばれたお陰で、最初に手術を受けることになったのがI少尉で、彼は既に手術台の上に横になっていた。正に処置を始めようとした時に二度目の空襲であった。流れ弾が近くに音をたてて落ちて来た。

医者も看護婦も皆飛び出して行ってしまった。私も無意識に腰が浮いたが、I少尉と視線が合って、自分の恐怖感に勝つように、ジーンと気を落ちつけて坐ることにした。彼は動けないので、放置は出来ない。一緒にいようとしたら、彼は私に退避してくれといった。自分はもう負傷していて、このまま死ぬかも知れないのだから、私のために健康な人を傷つけては申し訳ない頼むようにいうので、遂に私も退避することにした。彼I少尉としては、如何に心細かったことかと思うのである。

敵機は港と、飛行場を約三〇分間銃爆撃した。時に

午前十一時で、余りにも突然の空襲であった。敵機動部隊に関する情報は皆無で警報もない海からの急襲であったから、兵達は、並んで機具の受領中を射たれた。しかし、敵機は飛行機や飛行場の建物に重点をおいたため、我々の方は幸いにも流れ弾程度ですんだが、それでも三名の犠牲者を出した。

山野隊では、兵舎から出ようとしたところを射たれ、一〇名近くが戦死した。作業は中止となり、大急ぎで壕を掘り始めることになった。昼食もそこそこに掘る。午後一時、三度目の空襲である。また、敵機は兵舎と飛行機の残骸をねらって執拗に射ってきた。ちょうど、我々の手前で機首を下げるのであるが、自分に向かって来るように感じられてならないのである。椰子の梢すれすれの低空で射撃しながら飛ぶ。薬莖がバラバラと落ちてきて、ちょうど自分を狙ってくる——自分が的になっているように思われてならない。この日一瞬にして埠頭の船全部、せっかく揚陸したS兵団の武器弾薬、ガソリン全部、飛行機全部が焼かれてしまった。夜遅くまでドラムカンの誘発する轟音が砲撃のように

続き、赤々と天を焦がす炎、高く天に沖する黒煙、正に内地で見たニュース映画そっくりの風景である。

翌九月十日午前七時四十五分、前日と同時刻、同機数で、約三十分間銃爆撃していった。こちらの飛行機は全然飛ばないので、敵機は悠々飛び廻って帰って行った。

私は、寺田伍長と、前夜手術後危篤状態に陥った少尉を徹夜で看護したあと、帰隊する途中であった。道路横の凹みに身を伏せ、ただジーンとして立っている。近くのマンゴの木の下で、住民があるえて立っている。敵機の合間を縫って宿営地に帰り、朝食を摂る。休む間もなく、Sの屍体收容のため再び野戦病院に行かねばならない。

田原隊の軍医と共に出かける。ちょうど十一時頃である。カガヤン橋近くまで来た時、再び空襲である。

時刻も機数も前日と同じで、傍若無人に振る舞って三十分後に飛び去っていった。僅か二日間でミンダナオ島北部の航空戦力（といっても機数は大したことはない）は全滅である。地上兵团においても、スリガオに

輸送中の船が沈没して、兵員は全滅、武器弾薬、燃料、食糧もほとんど灰じんに帰ってしまった。

翌十一日、十二日には、セブ島が襲われた。ミンダナオが空襲されたというのに全く警戒体制をとらず、日曜日で外出中に、何百機という日本の飛行機が全滅してしまったとのことである。内地でいくら作っても間に合わないはずである。残った者が急拠飛び上がった行っただが、それはたつたの一機で、敵機を撃墜したとか、もし、休日でなくまた臨戦体制をとっていたならば、戦局はもう少し変わったものになっていたことであろう。次の十三日、十四日には、ルソン島のクラーク飛行場群が襲われたとか。何れにせよ、一週間たらずの間に、比島の航空戦力は全滅してしまったようである。

大爆撃

あの呪わしい九月九日のグラマン急襲により、状況はすっかり変わってしまった。労働者は全然集まらないうために、全くの少数の部隊である自身の総力あげてあの広大な地域の作業を続行しなければならなくなっ

た。しかし、小人数ではその量は知れたものである。今さら新しく飛行場を作っても何になるかという疑問もわく。しかし作れという命令が撤回されない限り、期日までの完工は不可能と知りつつも、いたし方なく無理矢理作業は続けられた。

時々敵機は飛ぶが全然射撃してこない。かくて約一カ月半余り、大した被害も無く過ぎて行つた。この間、他の島々は次々と空襲を受けていたようである。

昭和十九年十月十七日、敵がサルアン島（レイテ島の近くの小島）に上陸したとの知らせが入つた。ついに敵は我々の身近に迫つて来た。我々は、戦いはニューギニヤ、ソロモンの線で行われ、比島は後方基地であると思つていたのだが、余りにも早く自分の所が第一線になつてしまつた。その後一週間は情報が無かつたが、ついに十月二十四日、レイテ島タクロバンに敵上陸中との報が入る。レイテ決戦の火蓋が切られた。

これに先立つこと二日前の、昭和十九年十月二十二日、突如カガヤンが大空襲を受けた。この日の十一時、作業場に昼食を運ぶ車に同乗して、宿営地を出発しよ

うとしたとたん、“爆音”である。青く晴れ渡つた空に、B 24の大編隊が三機ずつ固まって、約二〇機が悠々と飛んでいる。カガヤンの街の上を旋回中である。

編隊は立派だった。青い空に映える白銀の機体、スマートな四発機、敵ながら素晴らしいものだと感心している時、先頭の一機がスーッと機首を下げ、胴体の下からバラバラと黒いものを落した。と同時にザーッと空を切る音！来たなと身を伏せると共に、ズダンズダンと十数発が、凄い地響きと共に爆発した。カガヤン橋の方である。これを皮切りに爆撃が始まつた。何十発落して行つただろうか。三十分後には、南に飛び去つてしまつた。

カガヤン橋付近に黒煙が上がり、街の中にある軍の中枢所は完全にやられた。その他、一時間足らずの間に街はすっかり灰になつてしまつた。残つたのは病院のみ。屋根に大きく赤十字が書いてあるが、いずれはやられるであろう事を見越して、重傷患者は一〇キロ程離れたグサの町に移動することになった。こうして一晩中かかつて移つた。一部は、部隊に復帰させた。

我々の所にもマラリアの高橋、岩沢、安本、松村、古川、荒山等が椰子林の中に移った。高橋の話によると、この爆撃の傍杖を喰って、隣にいた兵隊が戦死したとか。

明くれば、十月二十三日、前日と同時刻、同機数で、再び敵機は来襲して前回の空襲に焼け残った街を、すっかり破壊してしまった。一二機が四組の三機編隊をつくって、一機ずつ先頭になり、まるで爆撃練習でもするかのように、順番にカガヤン橋に一機につき一発づつ爆弾を落として行った。一二発の中、直撃弾なしの至近弾で、橋桁は大分ゆるんでしまった。凄い爆風を感じた。その中の一発が三〇〇メートル離れた民家を簡単に吹き飛ばしてしまった。凄い爆風を感じた。くすぶる煙の中に若い女が立って泣いていた。夫と子供を吹き飛ばされ、乳飲み子を背に一人生き残ったのである。

敵機は毎日やって来た。三十分ごとにコルセア、風の如く来て風の如く去るロッキードP38。その間に、南のモロタイ島を基地にした四発のコンソリの大編隊

が行きも帰りも同じ数で、レイテに行つて来る。よくもこんなに沢山いるものだと感心させられる。我が友軍機は、夜明けと夕暮れを利用し、時々やつと一機が飛ぶくらいである。

次第に悪化する状況の下で、我々の生活は敵機を避けながら続けられた。もう飛行場の作業など全く出来なくなつて、敵機の銃爆撃から身を守るため横穴を掘り、敵が上陸して来ると共に奥地の密林の山の中へと逃げ込んで、一七五名中約七五名の餓死者を出すことになる悲惨な飢餓行が始まるわけである。

カルメンの生活

米軍レイテ島に上陸以來度重なる爆撃のため飛行場作りもままならぬ。そして、新たにもらった命令はこの西飛行場の死守である（飛行場と云つても五〇メートル巾一五〇メートルの滑走路らしき整地した平地だけであるが）兵器は鉄砲八〇丁、現地で手に入れた機関銃一丁だけでどうして守るのであるうか。

ある朝、敵艦船群八〇隻、カミギン島西北六〇キロの地点を南下中との情報と共に戦備下令となった。取

るものも取りあえず陣地につかねばならぬ。患者の足手まといになる者はカルメンの居住地の壕に送ることにした。頼みとする寺田伍長をせきたてて救急材料を備えた。本部の書記の安芸准尉も大急ぎで書類の整理に当っている。悲愴な気が全般にみなぎっている。

陣地といっても自分の入る穴を掘ったのみ、しかも兵は少ない。火器もない。このまま死ぬしかないだろう。渡された手榴弾四個ずつしりと腰に應える。私はその一つを手にとって見た。敵上陸して来たらひとたまりもない。傷者と共にこの身を爆砕しよう。ずしんと冴えた頭にその場の光景を画きつつ悲愴な覚悟を決めた。

壕の前に本部の将校が集まっている。誰も一言もいわない。長い時間だった。暮色が迫ってきた、遙か北方海上に遠雷のような連続爆撃音が聞こえる。友軍機が叩いているのであろうか。ロッキードP38六機編隊もばらばらに南下して行った。明朝上陸するかも知れない。間もなく艦砲射撃も始まるだろう。見馴れたカガヤンの夕色に包まれて考えていた。

なるようになれと横になったが目は冴えて眠れない。歩哨兵の帯剣の音がガチャリガチャリと静まり返った暗黒の中から聞こえてくる。椰子の葉陰を透して澄んだ星空を眺めつつ、在りし日の思い出にふけっているうち、何時の間にか眠ってしまった。長い夜が明けたが状況は一向に変化しない。正午近く司令部より敵艦船群はミンダナオ海を西進してネグロス島方面に向かったことが分かった。やれやれ命が助かった。誰もが安堵の吐息をつき急に賑やかになった。その後将校団の話はもっぱら敵上陸の時期及び対策であった。三月という者もいる。四月という者もあり、いろいろである。

艦砲射撃を避けるため反対側の山の斜面に壕を掘り陣地を設けることを提案し、昭和十九年も終わる十二月三十一日、カルメンに移駐し、新しい年を迎えると共にカルメンの生活が始まった。

元旦には軍装し北方に向かって遙拝し、ささやかな野戦料理で新年を祝った。牽引車代わりに配属された西村戦車隊長（二台のみ）の面白い歌で、ひとしお賑

やかになった。コンソリの編隊爆撃ロッキードP38の軽い身のこなし、三十分毎に訪ねてくれるコルセア等々我々は豊富なお年玉を頂戴していた。状況は次第に悪化し、バナイ島に上がった。ネグロス島にもセブ島にも上陸し、そして直ぐ近くのカミギン島にも上陸した情報が入る。

しかし、我々は依然敵を待つ生活の続け、退屈しのぎに暮も覚えた。その頃新しく飛行第二師団の指揮下にあつた我々は、マライバライ付近に位置し、付近の道路補修という命令を貰った。海岸でみすみす死ぬことはなくなつた。内心喜びを隠し、北上して、A中尉、I主計、A少尉といろいろ候補地を探したが適当な所がない。マライバライ付近のバツバツトに定め、許可を得て移動の準備に取り掛かつた。

ちょうどその頃一月も終わり近く、毎日毎日雨が降り続いた。当然宿営地付近の増水が目立ち、カガヤン河の水量もみるみる増え、爆撃で弛んだ橋桁が流されてしまった。二月九日夜のことである。翌日見に行けば無惨、真中一〇〇メートルと両端を少し残したのみ

である。我々は孤立してしまつた。今上陸されたら袋の鼠である。徹夜で補修作業が始まつた。

一方バツバツトではA中尉の指揮で建築作業が進んでいる。事は急を要する。皆の汗と血の結晶で完成し、一部の隊貨の輸送も開始された。二月二十五日急に安達中尉は地区勤務となり、デルモンテの司令部に行つてしまつた。カルメンから一〇〇キロ奥地まで昼間は行動出来ぬため夜間の輸送作業は続く。路は荒れ果て凸凹で速度は出ない。車両も痛みブレーキパイプの破損が続出した。両方にいる患者の診断のため毎日往復した。愛用したのは最も整備のよい若井、砂田の車で、一台だけ整備が完備していた。幾日も夜間運行が続き皆疲労して来たが部隊として多すぎるほどの隊貨も全部運んでしまつた。四月一日、安達中尉が帰つて来てカガヤン左岸地区への移駐を伝えてきた。

本部は四月十日アグサンの海辺に近く、元S部隊のいた宿舎に移つた。そのころカガヤン周辺に敵出沒し飛行場にも敵分哨が出ている気配があるほど状況は悪化してきた。その夜、私はバツバツトへ行く予定で車

を待っていると、約三キロ離れたバイン工場に赤いのろしが上がった。スポンスポンという音と共に赤黄青と美しく夜空に信号が上がった。兵隊が海にエンジン音の音が、という。耳をすませば波の音に混じって鈍い音が聞こえてきた。

寺田を海まで見に行かせたが何も見当らない。その時カルメンより最後の引き揚げの車が来た。彼等は街を出て間もなく右手の山より迫撃砲、機関銃の射撃を受け、これを突破して来たのである。皆興奮の面持で埠頭に見馴れぬ船が入っていたぞ住民はどんだん山に逃げている。敵が上陸するかも知れぬ等々いっている。Y副官が色々指揮している。このままここに残るにしても少々気味が悪いので奥地がよいと出発してしまつた。

それから三日後の四月十三日、再びアグサンに戻つて来た。入院患者救出のためである。デルモンテまで来た時、部隊の車に出会つた。部隊長以下全員乗っている。話によればあの日に艦砲射撃を受け一目散に引き上げて来たとのこと。アラエで本部の車を焼いた。

凄い砲撃だったといっている。私は今からそこへ乗り込まねばならない。残つた二名を何としてでも連れ帰らねばならぬ。福原衛生上等兵と外兵二名を連れ谷口の車を出掛けた。

途中、車の焼跡まで来た時、Y副官がいて海岸は今は大したことない。船は引き上げたようだとこのことで車を進めた。アグサン坂を下りる燈火は全然つけることは出来ない。三日月の淡い光を頼りにやつと病院につき二名収容、追いかける気持ちで一目散にマルコに向かつて走つた。夜明けも間近だ。

車は凸凹の道をひた走つたマルコで本部と合流した。敵艦がカミギン島に立ち去つた間の際どい行動であつた。その朝八時半頃遙か五〇キロ北方カガヤンの方向に盛んに砲撃音が聞こえる。危ない所を逃げて来た。もう大丈夫と思つていたらコンソリの大編隊が来た。既にマライバライ方面を爆撃して、フンコラフンコラと爆音を轟かせ猛烈な爆撃である。慌てて付近の壕にとび込む。二五〇キロ爆弾らしい。ズダンズダンと周囲に落ちる。それも間もなく北に飛び去って行つ

た。

その夜さらにバツバツトまで前進である。ライトは切れる、パンクはする等散々な運行である。これを機会に部隊内に不運な出来事が続発した。

バツバツトの生活

四月十五日早朝、去る四日に飛行場で爆死した大上等兵の死体収容のため、部隊長より強行運行を命ぜられ谷口兵長、小西上等兵が朝霧の晴れ始めた頃、出発すべく準備中突如コルセア四機の急襲である。銃撃音がする。爆弾の地響きがする。それも一瞬の間、通り魔のごとく過ぎ去った。おそるおそる顔を上げて見ると車両のあつたと思われる方向に黒煙が上がっている。

やられたかと寺田伍長とかけつける途中、伝令に合い谷口兵長が撃たれたとのことである。走りながら私は思った。こちらへ来る時彼に車に乗り合わせた時、満州にいた時の命拾いの話などして、お前位運が良ければ大丈夫だなといったのに彼は寂しく、いや人間なんて何時何処でどうなるか分かりませんよ。と言

っていたのに。正にその通り翌々日敵機にやられたのだ。大きな声でお世話になりますといつているが顔面蒼白で右前膊伸側はざっくりと皮も肉も骨もえぐり取られている。小動脈も切れて細い赤い線がほとばしる。処置中また爆音である。逃げる訳にはいかぬ。続けていると近くで爆発し、凄じ爆風と共に砂が飛んでくる。冷や汗たらたらで処置を終わる。幸いに直撃は無かった。車は無残にも二台全焼である。

その夜、谷口を野病に入院させる準備中、突如近くの草原で火の手が上がった。真つ赤になり、火を背景に黒く車のシルエツトが浮かんでいる。傍で兵が必死になつて火を消そうとしている姿が見える。駆けつけてみれば秋山が消火している。皆で消火に務め一応鎮火したが、また一台使用に耐えない。暗いところの修理にローソクを使用し、洩れたガソリンに引火して燃え上がったとのことである。もう事故はこれで終わって欲しいと念じつつ、谷口を四野病に入院させた。

その後、相変わらず敵機が飛ぶ。時には梢すれすれにノースアメリカンが飛ぶ。口惜しいけれど如何とも

し難い。ある日、一機宿营地付近を旋回し始めた。草原にありありと車輪の跡をつけ林の所で無くなっているため、見付けたのであろう。I主計が拳銃を射っているが命中など覚束ない。

四月十七日、敵コタバトに上陸の報が入った。遂に来た。何れ一部は北上するであろう。またカガヤンにも上陸の公算大である。事態は緊迫の度を増して来た。部隊はマナゴックより山中に入ることになった。

既にK少尉は四月二十日現地に先行している。パツパツトにいる我々は毎日敵機におびやかされていた。四キロほど離れたタロアガン村の爆撃も毎日繰り返している。宿营地にいるのも何んとなく良い気持ちはないので、早々と診断を切り上げて現地自活に名を借りて付近の山に出掛けた。A少尉、AK中尉等も来ている。「手伝いに来ました」「ご苦労さん」。皆逃げ出す気持ちは同じである。山の上から村を射っている敵編隊の曲芸を見ると、ふと友軍機がやっているような錯覚がおこる。爆音がそっくりである。そういえばもうこの頃友軍機は全然飛ばない。今まで夕方から

夜にかけて時々姿を見せていたが、今は全く見えなくなった。

敵機の来ない時は芋植えである。今度もカルメン同様直ぐ移動で現地自活も何の役にも立たぬであろうが、住民にサーピスの積りで作業を続けた。付近に一軒家がある。一二名も狭い小さな家に雑居している。発熱に薬を与えると、お礼だといって時々芋をふかしてくれる。内地のような甘い芋である。不思議なことにここでは、軍票が通用している。コーヒー一ガンタが五ペソである。既に無価値になっているものも知らずに大切に財布にしまつてゆく老人を見ると何かしら哀れを催す。しかし大部分は塩と交換である。僅か一握りにも足らぬ量で。相当塩を大切にしている。海岸から相当離れた山の中で日本軍占領以来ほとんど補給もない彼等である。当然大切にしているのであろう。

敵は次第に前進を続けている。舟艇でもうカガヤンに入ったようだ。そしてその主力はダバオを衝くべく南下している。一部北上している模様である。地上部隊が慌ててかけている電話もとかく切れがちである。

部隊は急遽マナゴックに移動することになった。ほとんど出払った後には後発のA少尉とY少尉と医務室に残っているのみ。我々も移動するという直前マラマゲ飛行場の作業に派遣されていた兵員と、Y少尉、H少尉、寺田伍長など帰って来たが、彼等の大部分は疲れ切つて、栄養失調でほとんど動けぬ者も数名いる。寺田も発熱して弱っている。これらの患者を安全に収容せねばならぬ。

部隊長は止むを得ぬ場合、動き得ぬ者は適當の処置を取れ……といっているが、そんなことも出来ない。

寺田伍長を患者と先行させ、他の者も出発し、私は最後に車で出発した。珍しく昼間の行動である。谷深い山間の道を進む途中、他部隊の大尉が乗せよというので、彼を助手席に乗せ、私は荷台の上に立つて行った。間もなく崖際の道を曲がった途端、前方よりロッキードが飛んで来た。水平に真つ直ぐ来る。屋根を叩いて知らせて止め、傍らに飛び降りると同時に、銃撃である。

機関砲弾は運転手の頭の辺の窓ガラスを貫いてい

た。彼は深く伏せたため、助かったが、助手席の大尉はドアを開けて出ようとしたところを、胸部に銃弾を受け出血多量で即死である。背筋に冷や汗が流れた。

もし彼が乗ってくれなければ、もし彼が大尉でなく下級将校であつたら、私はそのまま助手席に残り死んでいたであろう。丁重に葬り、前進し四月二十八日の夜明け頃、我々はカタニグラド山を後に見てマナゴックの部落に入った。ここで約一週間、山に入る準備が始まるのだ。

マナゴック

私がマナゴックに到着した時、H副官が来た。相変わず張り切っている。そして

「直ぐ峠を越さねばならない。患者も充分構つてはられないでしょう。気合で連れて行くだけです」と慌ただしそうにいつてきた。

「ぼちぼちやるなんて呑気なことでは困る。敵が直ぐにも来るかも知れない。それまでにあの足柄峠を越さねばなりません」

と、いやにせかせかしている。今直ぐにでも敵が来る

ような話ぶりであるがマナゴックは未だ平和である。住民も平常通りの生活である。ところが我々が到着して四日目から大爆撃が始まった。敵も我が軍がこの地点に集結している情報でも入手したのであろう。

医務室は峠を越した大牟田に位置するよう命ぜられた。直ぐに患者を出発させた。脚の浮腫のひどい者、発熱の者、腰痛の者など彼等にあの急坂を登らせるのは無理である。他の兵で運んでやることは出来ない。仕方なく気合をかけて歩かせた。あえぎあえぎ登って行き、その日の中に全員峠を越えて異常なく着いた。

一仕事おわつたと安堵する間もなく次の問題が迫っている。彼等の食糧である。戦友が汗水流して運んだ食糧は、将来の部隊食で今手をつける訳にゆかぬ。自分の物は自分で運ばねばならぬ。これにも彼等は協力してやっていた。

日副官その他の者からきつくいわれていた。いかにも足手まといのように。彼等とて誰も好き好んで病気になるのではない。自分の仕事をして不幸にして病に犯されたのだ。私は出来るだけ大切にしようと努め

た。これは当然他の者の反感を買い、軍医は彼等を大事にし過ぎる。患者様々であるといわれていたが、輸送は次々と進む。大牟田に位置して峠を下り、重い薬の梱包を運んだ。皆頑張り、主計も六〇キロの俵をかついでいたが、峠の頂上でのびてしまった。その後一度も運ぶ姿は見なかった。

マナゴックの爆撃も激しくなってきた。同時に敵がマラマクに近づいたという情報が入ってきた。

ある日、谷口、桶谷、長屋の三名がピナコロの陸病から追い帰されてきた。リナボの四野病は連絡がないとて受け取らず、患者は道路で雨に打たれたまま待たせられ、中にはそのまま死亡した者もいた。幸いに三名は歩くことが出来たため部隊に辿りついてくれた。

搬送

大牟田よりさらに奥地への搬送は続けられた。私も大牟田をねぐらとして毎日毎日梱包を運んだ。我々の近くにW飛行場大隊の医務室があった。尋ねて行ったら、N軍医がいた。彼は私の一年先輩である。思いがけぬ所で出会って、大いに意を強くした。

ある日彼が酒一升持参してきた。久し振りに味わうアルコールの味が喉にしみる。部隊も相当持参したが部隊長が一人で飲んでしまつて我々の口にはほとんど入らなかつた。今夜はゆつくり飲める。二・三の将校と倒れかかつた小屋の中に坐り、ちびりちびりやつていた。これが比島最後の酒となつた。眼のふちを赤くして不平をぶちまけ、いろいろ将来を話合つた。

ある日昼食を終わつて休んでいると、S地区司令官の「将校おらぬか」という怒声が聞こえる。ちょうど居合わせたY将校が挨拶に出た。敬礼が……と何か怒っているようである。その時、何時もの定期便が来た。マナゴックの爆撃のためである。途端、彼が叫んだ。

「動くな見つかるぞ」私は噴き出したくなつた。この薄暗い密林の中で空飛ぶ飛行機に人の動くのが見えるものか。また怒声がある。「誰だ大声で話をする奴は。聞こえるぞ」。ますますおかしい、空飛ぶ飛行機にこの林の中の人声が聞こえるものか。少々頭がおかしいようである。この指揮官の下で生死を共にするのか。真に張り合ひのない次第である。

運搬を促進するため自動車道路を作り始めた。敵は近くのマラマグに砲弾を打ち込んでいる時に呑気な話である。それでも部隊より多数の兵員を使って漸く道の形は出来上がった。が一度車を乗り入れるや、泥に埋もれて動きがとれない。一キロ行くのに二日もかかる有様である。

あれ程の人を使つたら人力で運んだ方がどんなにか有効だつたのに。駄目であると分かつてもさらに奥へ奥へと作つて行つた。意地で作っているのか馬鹿でやっているのか分からない。やつと山にぶち当つて中止した。わざわざ苦勞して敵に侵入路を作つてやつたようなものである。

不可能と分かつても意地を通そうとする、固い頭の氣狂い司令官である。それにしても搬送は努力によつて次々と進められた。五月五日に真井へ、六日に奥真井へと進む。医務室も逐次前進して奥真井に至つた。全く歩けない者を水牛で搬送してくれたA隊長の努力にも大いに感謝せねばならぬ。気休めのビタミン注射を続けた。日軍曹が発熱して湿性肋膜炎になつたが、

行動行動で休む間もないが、彼は氣力で働いて自然に治ってしまった。置いてけぼりになれば敵にやられるというので四〇度の熱を押し必死に前進した。

搬送に日が過ぎて、五月三十一日突然戦備下令があった。敵の斥候が無用の自動車道路を伝ってT字路付近に出没はじめて、この付近より攻撃される度合が強まったためである。患者収容を終わり、布陣した陣地を見に行った。見通しの効かぬ密林の中でたつた八〇丁の鉄砲を振り廻して抵抗しようとするのである。

赤木建技中尉も所在なさそうに神妙に控えている。情報によれば友軍の斥候と敵の斥候がばったり出会って、不意を衝かれて二・三人負傷者を出して逃げ戻ってきたとのことである。幸いにもそれ以上敵は入って来なかった。

K少尉、Y少尉の先発偵察により部隊は逐次奥へと進んだ。その進度が早められると共に後に取り残された糧秣その他の物資が多くなってきた。六月に入つて松井田に進んだ。敵機は相変わらず飛び、一山隔てた現地自活班のいる所を爆撃している。多数の住民を連

れていて、見付かったのである。迫撃砲の音も混じっている。他の部隊も既にマナゴックよりシライに向かつて入つて行つた。彼等は既に敵に尻尾を掴まれていた。この方面の銃声も聞えて来る。

一方、川の左岸地区を北上している敵の一部が場合によっては我々より先に渡河点に達するかも知らんぬ。今のところ、彼等はバレンシヤから入つた山野部隊を攻撃しているようである。

六月二日、各部隊長集合があつた。そして命令を受領して来た。「現在の態勢においては部隊は包囲全滅されるおそれがある故に、これを離脱するために速やかに十日分の食糧を持ち、真直ぐ東進の予定である。

S部隊は最初の予定を変更しY部隊と合流せず、独自の行動をする予定なり」と、さらに付言して動き得ぬ者は止むを得ず置き去りにせよ、とある。私は極力患者を部隊と行動させるため、各部隊の協力を願つた。

何れにしても氣の狂つたS司令官の妄想により、無謀な前進命令が出た。ただ一人、死守玉砕を唱える渡辺部隊長のほかは易々としてこの命令に従つた。そし

てS司令官は東進して東海岸に出て、我が海軍の来援を待つのだともいつていた。

東進するにしても、地図に何も書いてない未測地をただ一途に何百キロも東へ行くのである。何故抵抗しないのか、全力を振るって花と散れと我々の将校も言っていたが、部隊長が命令に従って行動する以上、如何とも出来ない。

いよいよ六月四日出発と定まった。我々は極度に荷物の制限をした、苦心して運んだ食糧も薬物も、その大部分を置き去りにして僅か靴下に三本位の米を持ち、当てもない先の食糧を空頼みして行軍が開始された。私達の悲惨な死の行軍が始まったのだ。悲しい飢餓行が。

【解 説】

ミンダナオの戦争末期は、別に概説をしたが、執筆者は軍医であり、部隊は中南部カルメンの飢餓にある如く、飛行場作業も出来なくなったという。末期のフィリピン、ミンダナオの戦局は極めて悪化し、制空権は既に連合軍の手中にあり、第十四方面軍(比)の各

部隊は、レイテ失陥以来、現地自活、飢餓と病との戦いとなったという。

従って、手記本文にある如く、飛行場設定や戦闘能力は低下しているので、フィリピンに配置された飛行場設定隊を列記することとする。

昭和十九年三月二十三日、令甲第三三号により、野戦飛行場設定司令部三と設定隊三十八が臨時編成された。そのうち機械化のものは九隊、手作業のもの二十九隊である。完全編成は四月から九月となっているので、第一二五野戦飛行場設定隊は四月二十三日動員下令、豊橋で出発準備をしたわけである。

フィリピン所在の野戦飛行場設定隊は次の如くである。

第二十二、第二十四、第二二五、第二二六、第二二七、第二三四、第二三五、第二三七、第二三八、第二三九、第一四〇、第一四五
であり、特設飛行場設定隊は、

第一、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三、第十

四、第十五

であった。なお本文第一二五野戦飛行場設定隊の防諜号は、威第一五八三九部隊である。

ミンダナオ従軍回顧録

愛知県 大矢 昌 男

一、入 営

長兄は中国の除州より、次兄は東京より、姉は隣村より、それぞれ一家をあげて駆け付けてくれました。門には杉の葉でアーチをつくり「祝入営」と大書した額があげられ、「祝入営」の幟が飾られた。親戚知人・村人隣人など大勢きて、祝いの宴が開かれた。長兄が「我が家ではじめての入営だ、しっかり勤めてくれ」と激烈な口調のはげましの言葉、皆様より数々の激励の言葉を頂き、感激にむせび滅死奉公を誓いました。身はお国に捧げた体、生きては再びこの家のしきいはまたげぬ覚悟。骨もおそらく帰らぬものと思ひ髪は

毛と爪を切り、白紙につつみ、遺髪としたため母にわたした。「体をだいじにな」という母の目は泪に光っていた。叔父が私を部屋隅に呼び「命を大切に、必ず生きて帰れよ、これが本音だぞ」といった。

昭和十八年四月三日、出発の朝は村の鎮守の社に参拝、武運長久を祈り、大勢の村人の万歳の声に送られて三ヶ日駅に向かった。

三ヶ日町で、その日自分と同じ入営者が三人あったので、見送りの人・旗の波で埋めつくされていた。年の順で自分が挨拶をした。こんな大勢の前で話すことは初めてなのでちよつと緊張したが、まあまあ挨拶ができた。

歓呼の声や旗の波に送られ、列車はしだいに駅をはなれる。大勢の人波の中に母の顔だけがくつきりと浮かんでいる。だんだん小さくなって見えなくなるまでみつめていた。再び見ることも期しがたい故郷の山川、萬感胸にせまり目頭があつくなる思いであった。

広島に着いたら大勢の兵隊でごったがえしていた。初年兵受領の米山曹長のもつで、新しい軍服、靴など